

現 代 青 年 考

関 根 秀 和

1

5年まえの9月28日、札幌の南西約80キロ留寿都村の見渡すかぎりの牧草地の空に、目も鮮やかなオレンジ色の熱気球イカロス5号がぼかりとうかんだ。この日をゆめにみつづけてきた、気球の主である青年は「自分でつくった気球でまっ青な空にふんわりと浮かぶことのほうが、大学にはいたり、高給をとったりすることより、ぼくにははるかに価値あることなのである」とかたっている。¹⁾彼のことばのように既存の社会の枠組の中からぬけ出したところに、ダイレクトに自分の世界をもとめていく青年たちがいまふえてきている。蝶を追ってアフリカに行く青年、花をたずねて世界を歩く若い夫婦、吠えるホーン岬を単身でのりきった「信天翁二世」も「マーメイド三世」も、そういう意味ではただの冒険ずきではない。

ひところジャーナリズムをさわがせたヒッピーやフーテンは、しばしば逸脱した青年として社会病理的な視点から論じられた。つまりそこでは歪んだ映像として青年はとらえられ、全く一方的に、彼等をどのように社会へ復帰させればよいかというふうにことが論じられていた。しかし今日になって我々は、在来の非行とはことなった彼等の行動が、現代の価値体系への懐疑に深く根ざした、そういう意味でのいわゆる「日常性」の否定であることに気づいてきている。ジャーナリズムの一頁をにぎわすスマートさと他方のうす汚なきのちがいの

はあっても、イカロスからフーテンまで、青年たちの行動のなかに共通して存在している姿勢は「日常性」からの離脱の傾向である。

1) 梅棹エリオ『イカロス5号昇天す』「リーダーズダイジェスト」1973.6. P.67

2

青年が既存の価値体系の外に自分たちの世界をもとめていくのは、なにも今日にのみ特有のことがらではない。日本のかず多くの青年が「志」をいだいて次々に近世の桎梏から離脱した「脱藩」は、すでにわれわれの知るところである。もちろん単純に、若き志士たちとのアナロジーで今日の青年像をとらえることはできない、ただわれわれの時代においても、かつて、かの時代においてそうであったように、変動期を迎える期待のうねりが青年のあいだに次第に高まってきていることはおろそかにできない事実である。

3

現代社会はその生存を、社会的分業体系としてのほとんど無限大といえる分散と、反面で、その制御、管理機能の側面である統合にかけている。この分散と統合というたがいに矛盾した方向に加えられるたえまない膨脹は、複雑で容易なことではみとおしのきかない、多量の情報が交叉する「情報化社会」と、高度に発達した大衆操作のテクニックを駆使する「管理社会」「柔構造社会」を生みだした。現代社会はこのような意味で、青年にとって、はなはだしく不透明であり、またみせかけの自由に満ちた存在になっている。高度の分業がもたらした労働の細分化と専門化は、けっきょく、青年を労働過程から疎外する方向で作用したし、コマーシャルイズムがつくりだした「豊かな社会」のフィクションは消費の世界からも青年の主体性を奪いさった。

リッチでないのに

リッチな世界などわかりません

ハッピーでないのに

現代青年考

ハッピーな世界などえがけません
「夢」がないのに
「夢」をうることなどは……とても
嘘をついてもばれるものです

(48.12.27朝日)

とは、テレビコマーシャルの鬼才といわれた青年の遺体とともにみつかった彼の最後の言葉である。

4

「豊かな民主主義のなかでは豊かな討論が広くゆきわたり、また確立された枠組のなかでは豊かな討論は大いに寛容である。あらゆる見解が聞き入れられる。すなわち、共産主義者からファシストまで、左翼から右翼まで……。さらに、メディアを通して際限なく長びく論議では、ばかげた意見さえ賢い意見と同じように尊敬されるし、誤まった知識をもっているものも知識のあるものが語るかぎり語ってよいし、宣伝が教育と一緒にやってかけめぐり、真実は虚偽と手を組んで進んでいる」¹⁾つまり衝撃を吸収する装置が高度に発達している「柔構造社会」にはあらゆるものを埋没させてしまう寛容がみちみちしているとマルクーゼは言う。そこにはかってわが国にもみられたような、硬直したイデオロギーの擁護や思想の統制がないかわりに、とめどもなく思想の雑居性と相対化がひろがっていて、青年の政治参加も、論争も、運動も、いつのまにか寛容の地平に埋没してしまうことになる。70年代を迎える前後に、にわかに猛威をふるった学園闘争には、この寛容性にたいする非寛容の姿勢が明瞭にあらわれていた。非寛容のあせりがこおじて、あるばあいにはあの悪魔的なまでの自己絶対化とその悲劇が生じたのだと解することもできる。

1) Herbert Marcuse, *A Critique of Pure Tolerance*, 1965

大沢真一郎訳『純粹寛容批判』せりか書房 1964. P124 傍点筆者

数年来、生きがい論がさかんである。いまあらためて生きがいと真険に問われていることのなかには、「近代の理性」の深い挫折とのかかわりのなかで、とらえなければならない問題がひそんでいるようである。現代の価値体系から姿をけした「聖なるもの」のいくつか、たとえば戦争は、かつて青年の鮮烈な生きがいであった。そこでは「生きがい」と「死にがい」とは、事の両面であって不可分のものであった。そしてそれはさらに近代以前においては、ことさらに極限状態をまたなくても、信仰をとおしてきわめて日常的なことがらであった。ところが現代社会は、理性の延長であるもろもろの科学の手によって人間から死を引きはなすことにつとめ、既存の現代文化のなかでは、青年は拡大され延長された生をいかに処理するかということのみを思考することになってきている。つまりその意味で現代の青年は死にがいを喪失してしまっている。¹⁾

- 1) この種の問題を社会科学のレベルでとりあげようとする試みのひとつとして **Roger Caillois** の『現代社会学に関する四つのエッセー』をあげることもできるし、宗教社会学の分野での仕事に今後も多くを期待できると思う。

それゆえに、今日、青年の問題は緊急で根の深いテーマにならざるをえない。第43回日本社会学会大会で仲村祥一氏は青年論を次の三つの主要な類型に整理している。¹⁾ 1.労働の問題としての青年論、または階級論的な青年論、この種の見解においては世代論より階級論が先行し、階級論的視角を欠く見解は、イデオロギ的歪曲と戦線分断の危険性をもつという理由で批判される。2.文化の問題としての青年論、または世代論的な青年論、今日の青年世代は成熟のはやまりと職業的自立の延期によって生じた独自のユース・カルチャーのなかで、年長世代との文化的不連続を経験していると判断され、いかにして世代ギャップの架橋は可能か、いかにすれば青年を社会的に再統合しうるか、ということに関心が払われる。3.政治の問題としての青年論、または時代の問題

現代青年考

としての青年論，従来の組織化され制度化された既成政治にたいして，それを否定する極点で成立する政治性を青年の意識と行動に認めるたちは。

ここに整理されているそれぞれの類型に対応した青年の実像が今日確かに存在しているにちがいない。しかし，従来からなされてきたこれらの論議ではまだ充分にカバーしつくされていない現代の青年像があるのではないかと思う。そういう，いわば従来の議論の残余の部分にもうすこし光をあててみたい。

- 1) 塩原勉『青年問題への視角』「社会学評論」86.1971. P. 3